

『妻たちと娘たち』

日々の生活が人生のすべて

東 郷 秀 光

『妻たちと娘たち』でもって、ギヤスケル夫人は何を描きたかったのでしょうか。この問いはギヤスケル夫人の文学を考えるうえで格好な手掛かりを与えてくれるものです。なぜかと言いますと、それぞれが中心的なテーマとも言えるものを持つ4つの長編小説の後で『妻たちと娘たち』が書かれたのですし、この小説にはこれまでの4つの長編とは異なり、中心的なテーマと呼ぶべきものを見出すのが簡単でないと思われるからです。

では表題の『妻たちと娘たち』は誰のことを指しているのでしょうか。この表題が決定するまでに、『二人の母親』、『モリーとシンシア』、『ミスター・ギブスの娘たち』などが考えられましたが、副題の「日々の生活の物語」は一貫して変わることがなかったと言われております（G.D.サンダーズ『エリザベス・ギヤスケル』 ラッセル&ラッセル、1929年）。特殊な場合を除きますと、日々の生活のなかには人々の姿があり、妻たちも娘たちもいるのが普通です。ではここでは「妻たちと娘たち」とは誰のことでしょうか。それはミセス・ギブスン、ミセス・ハムリーとモリー・ギブスン、シンシア・カークパトリックのことだと考える人がおりますが、グレアム・ハンドリーは「妻たち」とは後妻のミセス・ギブスン、ミセス・ハムリー、さらにレイディ・カムナー、エーメのことも含めております（エリザベス・ギヤスケル著『妻たちと娘たち』への序文、エブリーマン・ライブラリー、2000年）。この解釈のほう副題の「日々の生活の物語」にうまく適合するように思われます。そうしますと、「娘たち」とはモリー・ギブスン、シンシア・カークパトリック、レイディ・ハリエット、ミス・ブラウニング姉妹を意味してよいことになり、ロンドンのヘレン・カークパトリックを含めても良いかもしれません。

その結果としてこの作品の中心にあるものの捉え方が変わってきます。『妻た

ちと娘たち』は成長や愛や結婚を中心として、当時の女性たちが置かれていた状況に目を注いだ小説ということになります。これらの妻たちも娘たちも、それぞれに個性的な人物として描かれておりますが、作品の中での比重が同じというわけではありません。この作品はモリー・ギブスンが存在するおかげで統一した世界を作っているのです。この点については後でまた繰り返すことになります。

「日々の生活の物語」とは多くの人々と多くの状況が織り成す結果として生まれるものです。しかし成長、愛、結婚などはまことに日常ありふれた問題であるため、文学作品のテーマとして描くほどの事ではないかのように思われがちです。しかし事実は違います。同じ作者の短編作品「異父兄弟」を思い起こしてみれば事は明らかです。どこにでもありそうな結婚または再婚が、どのような人間模様を展開する結果になるか、それが作家の腕前によっていかに感動的な場面となるかを、私たちは知っております。

どこにでもありそうな物語とは言っても、物語の進展には中心の糸とも呼ばれるべきものがあります。『妻たちと娘たち』の中では、たしかにシンシア・カークパトリックの存在は際立っております。シンシアはミセス・ギブスン以上に、またモリー以上に鮮やかに描き出される場面が数多くあります。しかしシンシアは美しい際だった存在には違いありませんが、その美しさは砕けた鏡が輝くようだと表現されています。しかもシンシアは自分の美しさの魅力が男性たちを惹きつけないでは気が済まない女性として描かれます。そしてシンシアは生活に対する積極的な理想を何一つ持たない若い女性として登場しているのです。シンシアがこのような女性であるのにはそれなりの背景があり、その理由も語られてもおりますが、彼女は当時の男性社会が女性から期待する以上の生き方はしない女性として登場しております。美しく魅力的で個性的に見えるシンシアは実は平凡なのです。

『妻たちと娘たち』がモリー・ギブスンから始まり、モリー・ギブスンをもって終わるのは十分に理由のあることなのです。モリーが父親の再婚の決心を知ったときの悲しみ、二度目の母となったミセス・ギブスンの浅薄さと虚栄心に気づいたときの悩み、シンシアの苦境を知ったときの同情と援助、オズボーンの妻エーメとその子に対する愛情と献身的奉仕など、モリーは日常の問題に直面する中で他人を思いやり、他人の気持ちを理解出来る人間になってゆきます。モリーは

どこか当時の標準からは異なる女性として描かれます。モリーは平凡に見えて、実は個性的な女性として成長してゆきますが、このような成長はシンシアにはあり得ないことです。シンシアはあるときモリーに医師ギブスの道徳的水準が高すぎると語ります。シンシアとモリーにはミセス・ギブスンとミスター・ギブスンの違いがそれぞれ表されており、こう考えてみますと、モリーが『妻たちと娘たち』の中心的な価値観を担う人物だと考えられますし、読者はそう思って読み進んでゆきます。

モリーがこの小説の中心の糸をなすことを認めると、物語はまるで緊密に織られた布地のように様々な人物たちが交叉して、しかも鮮やかな姿をとって展開してゆくののが分かります。例を一、二挙げてみましょう。ミスター・プレストンはロード・カムナーの土地管理人です。シンシアから嫌悪されている人物ですが、なんと見事に描かれていることでしょう。この小説の読者は、決してシンシアの視点だけからミスター・プレストンを見てはおりません。彼はシンシアがお金に困っていた、まだ小娘だったころの約束を盾にして、交際の継続と将来の結婚を主張する男性ですが、作者ギヤスケル夫人からは正当な扱いを受けています。執拗な人間ですが、それは自分の情熱に忠実だからです。彼はある種の魅力すら備えています。しかし何故ミスター・プレストンがシンシアに惹かれているかと問いますと、彼に対する解釈に変化が生じます。ミスター・プレストンがシンシアに心を捉えられているのは、彼女が美しいから、ということになります。人生に対する彼女の理想や周囲の人々に対する思い、つまり彼女の生きる態度に惹かれているのではないことが判明します。そして男前の外見や有能な仕事ぶりにも拘らず、ミスター・プレストンも個性的な男性ではなくなります。こう考えますとシンシアはモリーと良い対照をなしています。

またミセス・ギブスンを取りあげてみましょう。彼女は貧しい牧師補カークパトリックと結婚し、一人娘シンシアを儲けますが、間もなく未亡人となり、辛うじて対面を保てる程度の生活を送るために悪戦苦闘しております。妻に先立たれ、一人娘モリーを抱えた医師ギブスンが、未亡人ミセス・カークパトリックと再婚することから、物語は展開してゆきます。再婚してミセス・ギブスンとなった彼女は外見は美しく、物腰は魅力的な女性ですが、感情は浅く、考え方も平板で、見事なほど巧みな虚栄心で覆われていることが描きだされます。結婚直後にこの

点にいち早く気づいた夫の医師ギブスは沈黙を守ります。しかしその沈黙のなかに読者は彼の後悔の気持ちを明らかに読み取ってゆきます。

この作品の読者は、このような母親を迎えることになった年頃の娘モリーに心から同情しないわけにはゆきません。しかし作者ギaskell夫人は、ミセス・ギブスの浅薄さや虚栄心を悪意をもって描写することは決してありません。その描き方は、手加減している結果から生じるものではありません。ある人が置かれた境遇を十分に理解した上で描くならば、このような結果になろうといった描き方なのです。

ですから私はウィニフレッド・ジェランの見方に賛成です。その意見とは、ギaskell夫人が「この時期より前に『妻たちと娘たち』を書くことは不可能だったでしょう。そのための経験全体が欠けていたでしょうし、そのための若い人々の成長の過程 これが作品の主要な魅力ですが を経験を積んだ、共感の目で観察することは不可能だったでしょう」(ウィニフレッド・ジェラン『エリザベス・ギaskell 一つの伝記』 オックスフォード・ユニバーシティ・プレス、1976年) というものです。

『妻たちと娘たち』がギaskell夫人の最も円熟した、最高の傑作であることの理由として、描写のありかたを指摘する批評家は少なくありません。ウィニフレッド・ジェランは、この小説の登場人物が内部から築きあげられ、対話でもって自己を語らせていることに注目しております(前掲書)。他にもA.B.ホプキンズ(『エリザベス・ギaskell 生涯と作品』 ジョン・レーマン、1952年)やマーガレット・ガンツ(『エリザベス・ギaskell 葛藤する芸術家』 トウエン・パブリッシャーズ、1969年)などがほぼ同じような点に注目しております。それまでの多くの作品ではギaskell夫人が作者として語ってきたのに、この作品では登場人物自身が多くを語っているというのですから、この指摘は注目に値すると思われまふ。

優れた小説と呼ばれるものは、作者が語りたことを語るのではなく、登場人物のお陰で、その世界がいやおうなしに展開してゆく形をとるものです。この点に関しては『メアリ・バートン』を想起するのが適切かと思ひます。『メアリ・バートン』は重要な社会問題を描いた作品ですが、「わたしは」という言い方が作品の中で60回も用いられ、作者が作品の中の出来事や人物の行動に対して脇

から説明をつけ加えたり、弁明を行なったりしています。その分だけ作品として沸きあがる力を弱めていると考えられます。この手法では作者は最初から主張したいことがあり、それを読者に向かって説いているもので、小説はそのための手段に用いられているとの印象を免れないのです。

『妻たちと娘たち』にはイングランド北部の田舎町の日々の生活の物語が描かれています。そしてその描き方の際だった特徴は、人物の捉え方がヒューマールに溢れていることです。幾つかの例を挙げてみましょう。モリーが初めて御殿に招かれたとき、気分が悪くなります。それを知って飲み物と食べ物を、後にミセス・ギブスンとなるクレアが持ってきますが、モリーには食欲がないため、クレアがほとんど平らげてしまい、何食わぬ顔をしています。その結果、気分が悪いはずのモリーが食べてしまったかのような印象を周囲の人々に与えます（第2章）。美人でお淑やかなクレアが大食いだという描写がおかしみを生み出します。もう一つの例を挙げますと、医師ギブスンが医者見習いのミスター・コックスのモリーへの恋文に気がつく場面があります。その手紙にモリーの瞳の美しさに心を捉えられた様を語っているのを知り、医師ギブスは熱愛の治療にモリーに青いサングラスをかけさせればよいだろうか言います（第5章）。ミスター・コックスは若い人の気持ちをからかっていると抗議しますが、読者はおかしみを感じないわけにはゆきません。最後にもう一つ例を挙げますと、ミス・ブラウニングが妹のミス・フィービからモリーについての町の噂を無理やり引き出す場面が描かれております（第47章）。そしてその噂が不当であり、ミス・フィービが不当な噂を口にしたという理由から殴りつける場面があります。この理不尽な態度はミス・ブラウニングの人柄とその気持ちを何と巧みに描いていることでしょう。

「日々の生活の物語」という副題に私は拘り過ぎているのでしょうか。しかしある作品が、日々の生活を深く観察した結果であればこそ、そこには人生に何かを求める人々の姿を登場させずにはいられないのです。ここではその人々とはモリー・ギブスンであり、ロジャー・ハムリーです。人々は自分が求めているものを明確に自覚しているとはかぎりません。時には自分の置かれた状況にたいする漠とした不満の形を取ることもあります。時には何か止むに止まれぬ衝動につき動かされることもあります。このような姿は、数多く描かれてきました。例えばシャーロット・ブロンテの『シャーリー』のキャロライン・ヘルストンに見られま

すし、またジョージ・エリオットの『ミドル・マーチ』のドロシア・ブルックに見ることもできます。

モリー・ギブスンとロジャー・ハムリーはやがて結婚するという事は確実です。この二人がお互いに惹かれ合う理由は、例えばロンドンの法律家ミスター・ヘンダースンとシンシア・カークパトリックとが結婚に至る理由とは異なっています。ミスター・ヘンダースンはロンドンの繁盛する法律家であり、収入もある洗練された男前の青年です。彼がシンシアに惹かれるのは、その美しさのためであり、愛とか生活に対する憧れなどからではありません。この点はロジャー・ハムリーとは大きく異なり、シンシアが安心して応じることができる理由なのです。医師ギブスンが後のミセス・ギブスン、つまりカークパトリック夫人と結婚する理由も異なっています。再婚の大義名分は、娘モリーを見守ってくれる母親が必要だということでした。ロード・カムナーがレイデイ・カムナーと結婚するに至った経緯は明確にはされていません。熱烈な愛情の結果とか、人生に対する理想を共有した結果だとは考えられません。この二人は家柄も身分も財産も釣り合っており、当然のごとくに結婚したことが想像されます。

ロジャー・ハムリーはその地方では最も古い家柄のスクワイアの家に生まれたとはいえ、二男であり、さしたる財産があるわけでもありません。女性の標準的な見方からすれば、もてはやされるような美男子でもありません。その彼をモリーが尊敬し、敬愛するのは彼の周囲の人々に対する態度のためであり、生活に向かう態度のためです。たしかに彼の現在の物質的条件は豊かでないにしても、将来の可能性が豊かであり、洋々と開かれているからなのです。これを理解し、尊敬できるのはモリーのような女性なのです。

『妻たちと娘たち』の中で、読者がモリーやロジャーに接するとき、まるで日常の生活の奥底に鼓動する脈にうち当たったかのような感じを抱くのです。ギヤスケル夫人の文学には人生の日々の姿が深く観察され、巧みに描かれているからなのです。そこから読者は自分の問い掛けに応じて、考察のための豊かな材料を導き出すことができます。

ある種の信条や意見は時代から遅れ、古びることがあります。しかしある作品が人々の生活の根底にある生き方を捉えているとき、その作品が古くなることは難しいものです。ここにギヤスケルの文学が時代が移り、読者が変わっても、絶

えず新しく読み直され、解釈され直して読者の心に生き続けてゆく理由があるのだと思います。それを私たちは、宝の山と呼び、古典とも呼ぶのです。

